

踏まねてもまれても生き返る

NO.000-1 テスト版01 2024.4.25

いたばし 雑草通信

編集：発行 木村松夫

090-8646-9757

matsuokimura@gmail.com

メール発信のみの情報紙です。無料購読希望の方はメールでお申込みください。PDFでお送りします。



ノボロギク キク科 花序は1~2cm 頭花の直径は5~7mm

今から38年前の1986年、初めていたばし自然観察会のフィールドワークに参加した時には植物の名前なんかまったく知りませんでした。道端に咲いている花を見て、観察会リーダーの山下洵子さんに「これ、なんて花なの？」と訊いたのがこの野草。「ノボロギクですよ」と教えられて、漢字で書くと「野原の檻樓（ぼろ）な菊」なのだろうから、ずいぶんひどい名前が付けられたものだ、それでも立派に生きているんだと思った瞬間、この花にいとおいさを感じました。

この状態で満開しているのですが、小さな花がたくさん集まっているのを「花序（かじょ）」と言います。これがキク科の花の特徴。加えて一つひとつの花は舌状花（ぜつじょうか＝注1参照）が普通なのに、このノボロギクの黄色い粟（あわ）のようなものは舌状花ではありません。写真をよく見ると、この粟状のものが開いてその中に花粉を付けた雄蕊が見られます。となると5弁の花びらみたいなのは何なのだ？

初観察から38年目にして、やっと一步踏み込んだ観察になりました。でも、こんな面倒な観察は苦手なので、これからも**植物が生きているその姿の美しさを認める観察**が軸になるでしょう。

<注1>舌のように細長い花弁のことをこのように呼びます。舌状花の1片には雌蕊（めしべ）と雄蕊（おしべ）があって、立派に「1つの花」です。キク科の花はその1片が何十個も何百個も集合して「1つの花のように見える」のが一般的ですが、舌状花がないものもたくさんあります。

いたばし自然観察会に参加するようになってしばらくすると、一人で花や景色の写真を撮り歩くようになりました。真夏のギラギラした太陽の下で生きいきと咲いているこの花を見つけて、自力で植物図鑑を調べて同定（どうてい＝注2参照）を行った初めての植物がハキダメギクでした。これも「なんてひどい名前を付けたんだ！ 命名者は根性の悪い人」と思いながら図鑑の説明を読むと、なんと牧野富太郎でした。ご本人も「星形できれい」と説明しているのだから、もっと良い名付けをしてくれたらよいのに。

それ以来、**植物の名前にこだわったり、珍しさや美しさを見つけるための植物観察はやめよう、その植物がしっかりと生きていることを認めるだけでよい**と思うようになりました。

<注2>植物の分類では一つひとつの植物を「種」（たねとは読まずしゅと読みます）として区別します。「種」とは、だから植物の名前と言っても良いでしょう。それを決定する作業を「同定」と言います。



ハキダメギク キク科 頭花の直径は約5 mm

「雑草と言う名の花はない」

日本植物学の父・牧野富太郎の言葉

何年か前に板橋区立エコポリスセンターの環境一斉調査で都立赤塚公園大門地区の植物調査を行っていた時のことでした。5月の連休明けで、擬木柵内のニリンソウはもう姿を消して、春の植物が林内を覆っていましたが、ある参加者が「なんだ、これみんな雑草じゃないか」と吐き捨てるように言いました。わたしはやたらに腹が立って、「みんな、一生懸命に生きているんだよ！ その生きざまを認めることができなきゃ、我々だって人間じゃなくなるんだ！」と怒鳴り返したことがあります。

それ以来、どういうわけだか「雑草」という言い方に抵抗を感じなくなりました。78歳になったわたしはこれまで何度も何度も人生やり直し、そのたびに出直ししてきたのだから「雑草人生」。そういう呼び方の方が自分らしくて良いと思うのです。

2023年12月、体力と気力が衰えてきて「赤塚公園ニリンソウを守る会」の運営サポーターをやめさせていただき、活動の第一線から引退しました。同会はその後、団体として再組織化し、複数の活動者によって運営が続けられていますが、木村はこれまでの活動をリセットし、38年前に赤塚の武蔵野台地崖線に巡り合った初心に立ち帰っての活動を、今度は一で行っていくことにしました。どんな活動になるかはまだ未定ですが、できるだけ頑張っている人たちの応援をしたいとも考えています。

この新聞では植物の話題のほか、世間話もしていきたいと思います。